たことは話せないと、彼女は辛い面持ちで幾度も涙を流した。その度に、そんなものは気にしないと、トゥラスは彼女の皺くちゃになった手を握った。

髪が黒と白のまだらになってきているというのに、自分のために森で生きる覚悟を決めてくれた養母。彼女が育ててくれた自分が全てだ。そう言うと、彼女はもっと泣いた。生みの母親に勝る美しい心がそこにあるとトゥラスは知っていた。

だが彼女は幾年か前に死んでしまった。あれは夕暮れ時の、目覚めの時の物音で気付いた。手製の釜戸の前で倒れていたのだ。原因は分からない。病だったのだろうか。気付けなかった自分が悔しかった。

大きい兄弟が一頭、頭を押し付けてきた。

「そうか。……そうだな。残念だけど、やっぱり俺はお前たちと違って人間なんだよな」

もう一頭の大きい兄弟が喉を鳴らした。雷鳴が転がるような。だがそれは、とてもやわらかい声だった。それにトゥラスは、少し悲しく笑った。

「ありがとうな。そうやって悲しんでくれるならここに残ろうかなんて思うけど、……でもお前だって、やっぱりばあさんはそう言ってると思うんだな」

岩は何も語らない。そこに厳かに腰を据えて、下にあるはずの骨も無口だ。何も言わないなんて彼女らしくはないが、聞こえないだけで、きっと彼女は自分を励ましてくれている。

彼女の声が聞こえた気がした。トゥラス、あなたはこの森で生涯を閉じてはならない。もっと広い世界があなたを待っている。そう

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

いう運命なのだから。

胸に下げた革袋を取り出した。養母の形見ではなかったが、昔彼女に、これだけは手放すなと渡されたものだった。これがいずれ、トゥラスがあるべき本来の道へ導くと。

革袋の紐を緩め、そこから手のひらに転がったのは、あらゆる色が詰め込まれ輝く不思議な石だった。月長石のようなやや乳白色の透明な石の中に、赤や青、緑、黄、黒、金、銀の光が輝いていた。その不思議な煌めきは、微々たる月光でさえも光を放つ。ただその形は妙だった。勾玉のような形だと養母は言っていた。

煌めく石は、トゥラスには何も告げない。だが自分はこの石を握って生まれてきたと聞いた。そう言われると自分の半身のようで、養母の教えに従っていつも身につけている。

その石にトゥラスは問いかけた。お前は俺に何かを示すのか？　だったら今、俺はどうすべきか言ってみろ。そうでないと、このまま森で生き、森の一部として生涯を閉じてやってもいいんだぞ、と。

森が風と囁く声しか聞こえない。石は何も言わない。それもそうだ。石に口はない。

トゥラスは石を革袋に戻した。

岩に背をあずけて座る。養母が傍らにいるような安心感がふわりと身を包んだ。両脇には二頭の大きな兄弟が寄り添ってくれる。もう一頭の小さい白の兄弟は、トゥラスの膝の上によじ登ってくる。ごろごろと背をすりつけるように身をよじる。まだやんちゃ盛りだ。その子虎の方耳にきらりと光るのは、養母の形見の涙の粒ほどの小さな耳飾り。自分の方耳にも同じものがある。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「俺はお前たちに会えてよかったよ。独りでこの森に生きるのは、きっと寂しくて辛かったんだろうな」

兄弟らは、声こそ発してしゃべりはしないが、こちらに意思を伝えてくれる。それをどうして自分が理解できているのかは、よくわからなかった。最初はこれが当たり前だと思っていたが、獣と会話する自分の力に気付いた養母は、たいそうたまげていた。普通の人間には無い力だという。動物らの声が聞こえるトゥラスはやはり悪魔の子ではなかったと、養母は喜んだ。

養母が死んでから、一層兄弟はかけがえのない存在となった。いつもそばにいてくれて、森で生きるのは楽しかった。できることなら、兄弟と離れたくはない。

「……そんなに寂しいのかって？　そりゃそうさ」

ほんの少し笑ってみせた。強がりなのを兄弟らはすぐに見透かすだろう。一番大きい兄弟がじっとこちらを見てくる。その眼に自分の顔が写り込んでいた。だから少しだけ、目を反らした。

「わかってる。俺はやっぱり人間だ。お前たちが言うように、ここを離れなきゃならない」

鬣（たてがみ）のようにふわりと逆立った首回りを、ぽんぽんと二つたたいた。

「お前も寂しいって？　ああ、そうだな。俺たちは家族だ。……はは。そんな風に言われたら、行けなくなるじゃないか」

もう一頭の大きな兄弟が頭を押し付け、惜しむようにトゥラスの頬を撫でた。

「そうさ。俺らしくないだろ？　こんなに悲

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

しい……」

トゥラスはその兄弟の大きな体に顔をうずめた。熱くなった目を、押しつけて。

いつもは狩りのその夜に、ざわめく獣たちは泉のほとりに集まって、今宵は喰うも喰われるもなしに、別れを惜しんだ。

目を覚ますと、暗闇に包まれていた。だが深々とする闇ではない。肌に活発な空気が刺さる。外は朝だ。

チュンオウが小屋を出ると、眩しい朝日が森に降り注いでいた。昨晩は影を落とすばかりだった葉は光を受けて青々と光り、黄緑色の葉脈の間の翼をいっぱいに広げている。小鳥のさえずりが森を彩り、風は踊っていた。

トゥラスは光が苦手だと言っていた。だからこの青潭（せいたん）な森を流れる朝日のせせらぎも一切通さない小屋を作ったに違いない。小屋をよく見ると、丸太の隙間には粘土や草が詰められている。

足元の、梯子（はしご）がきしんだ。

「おっと。爺さん、もう起きてたのか」

昨日と違ってトゥラスは上着も着て、布をフードのように頭に巻いていた。目深に、日差しを避けるように。それから大きな袋を腰に下げている。

上ってきたトゥラスに小屋の中に促され、チュンオウは狭い中に戻った。チュンオウは彼のベッドに再び腰をおろした。

トゥラスは小屋の戸を閉め、小屋の中に闇を閉じ込めた。しかしそこにはやわらかな光

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

があった。蛍を手で包み込んだようなささやかな灯だ。トゥラスは気を遣って火種を入れた壺を持ってきてくれたらしい。部屋の片隅にあった、使い古したランプに火を移すと、部屋にあたたかい光が広がった。

火種の壺に蓋をしてから腰の袋を降ろし、トゥラスはフードを下ろして部屋の隅にある小さな椅子に腰かけた。

トゥラスが袋を探ると、中から拳より大きな木の実が出てきた。トゥラスは小刀で器用に厚そうな皮をむき、親指を頂点に刺して二つに割いた。ランプの明かりにもみずみずしく光っている。柑橘類なのか。小粒の弾けそうな袋が密集している。だが酸っぱい香よりも、鼻に粘りつくようなとても甘い香りが漂った。

二つに割いた片方を、トゥラスはチュンオウに差し出した。

「爺さんの好みは知らないから、とりあえず朝飯にこれ喰ってくれ」

「おお、すまない」

チュンオウはひと房ずつ食べようとしたが、トゥラスはそのままかぶりついている。チュンオウもトゥラスの真似をしてかぶりついた。一つ一つの房の皮も硬いので、なるほどこの食べ方は食べやすい。房を噛むと、まるで蜜のような甘さが広がった。

「甘すぎるだろ？　俺はあまり好きじゃない」

「そうか？　とても美味だが」

トゥラスは笑って、もうひと房にかぶりついた。

「いつもこれを食べているのか？」

「いいや。日の出前に、夜のうちに狩った動

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

物を焼いて食ってる。それにこれじゃない別の種類の木の実も食べる」

「ではなぜ今日はこれを食べるのだ？」

トゥラスは最後の一つを口に放り込んで、適当な咀嚼（そしゃく）の後に飲み込んだ。

「今日の夜は狩りができなかったからな」

袋からもう一つ実を取り出して、ナイフに果実を押しあて器用に皮を剥きながら言った。

「それにこれは甘い分、栄養たっぷりだ。旅の朝にはもってこいさ」

「それは……私と共に行くということか？」

「爺さんが言いだしたんだぜ」

その言葉はあまりにそっけない。差し出された半分の実を受取りながら、チュンオウは目を丸くした。

「決心はついたのか？」

「あいつらが行ってこいって。この森は俺の一時のねぐらにすぎなくて、いつかは旅立ちの日がくるんだ、ってな。別れがあるのをあいつらは知っていたらしい。あいつらは虎で俺は人間だ。人間は愚かで、堕落してしまうだけの力を持っていると言っていた。その力を堕落ではなく森や兄弟たちのために使うには、ここにいてはできないらしい」

その笑みに悲しそうな色が見えたが、それは彼自身の嘆息によって吹き消された。上目遣いの、試すような眼差しがこちらを覗く。

「だが、俺はあいつらと共に生きた。人間だが、時に虎だ。それでも俺を連れてくっていう、爺さんの覚悟はあるのかい？」

森で生きてきた青年の瞳。そこには獣のも

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

のに見られる炯々（けいけい）たる光が灯っている。ランプのやわらかい光にさえ、その鋭さは際立つ。猛々しいものを秘めた、威風堂々の気性。一瞬そこに虎が見えた気がした。

「そなたの眼は世界を見るためにある。あらゆるものを見極め、まだ若いその溢れる力をいかに使うか己が目にて定めよ。虎は気高く賢い。私はそなたの歩みの助けとなろう」

身など見透かし、彼のその瞳は真髄を射る。真髄など、その心を持つ本人でさえも見失うこともある。トゥラスは何を見たのだろうか。彼はその目にたくましい笑みをたたえた。

「度胸あるじゃねえか」

トゥラスは笑みのまま目を閉じ、そして次に開けた時には虎の気性も身を潜めていた。その目をどこか遠くに向けて、トゥラスは話しだした。

「俺はこの姿から悪魔の子として捨てられた。何もできない子供の頃に森に捨てられて、本当はそのまま狼の腹にでも納まって死んじまうはずだった。でもそうならなかったのは、俺を育ててくれたばあさんがいたからだ。ばあさんとは血の繋がりはないが、俺が幼くして捨てられるのを不憫に思って、森で育ててくれた。俺が人語を使えるのはばあさんのおかげだ。……もう生きちゃいないけどな」

チュンオウは、じっとトゥラスの話に耳を傾けた。

「ばあさんは、俺の親や出生の秘密だとかは教えられないと言った。でもずっと、俺には何か大きな役目があると言い続けていた。これがその証らしい」

トゥラスは首に下げた紐をたぐり、小さな

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

革袋を胸から出した。トゥラスが革袋から取り出したのは、それは美しい石だった。ランプの光に虹色のきらめきを放つ勾玉であった。

「これは……！　これはどこで手に入れたのだ？」

「俺はこれを握って生まれてきたらしい。この不思議な形にはとても重要な意味があるとばあさんは言い切っていた。この石を持っていれば俺を必ず運命の下に導き、やるべきことも見えるはずだと。全部ばあさんに言われたことだが、俺もこいつには何かあると思ってる。とても懐かしい感じがするし、とんでもない何かが潜んでいるようにも感じるんだ」

トゥラスはそれを強く握りしめた。

彼の言いたいことはよくわかった。実は自分も目に見えぬ強大な力に引っ張られるように、時に急き立てられるように旅を続けているからだ。

果実はベッドに置いた。チュンオウは、懐から赤い絹の小袋を取り出した。丁寧に縛った紐を解いて逆さにすると、指輪が一つ皺だらけの手のひらに転がった。その指輪を摘み、ランプの灯にかざした。複雑な龍や鳥の彫刻にはめ込まれている石は琥珀色で、中心に金粉が集まったような光を持つ不思議な石であった。

「まさか、爺さんのそれも……？」

トゥラスが身を乗り出して聞いてきたが、チュンオウは重たく首を振った。

「わからぬ。……そなたの石のように私と共に生まれた石ではないのだ。しかしこれぞ運命であるかのように、あらゆる人の手を渡っ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

てから私のもとへやってきた。私はこの石に不思議な力を感じ、それに導かれるように旅を始めた。私もいずれはこの石によって、成すべきことを与えられるような気がしてならんのだ」

静寂が、いつの間にかそこに腰を据えていた。トゥラスは呼吸も忘れているかのように、じっとチュンオウの手のひらの指輪に見入っていた。しばらくして、トゥラスは大きく息を吸って、ようやく視線を指輪から外してこちらに向けた。

「じゃあ爺さんの旅は、その成すべきことを探す旅なのか？」

「そうとも言えるが、もうひとつ理由はある」

問いかけてくるトゥラスの眼差しに、チュンオウは答えてやった。

「この世界には、闇が広がり始めておる」

目を閉じると、昔身を投じていた戦の光景が映された。雄叫び、炎、血。泣き叫ぶ女子供。無念の表情で死にゆく男。涙、悲鳴。その裏にこだまする、おぞましい笑い声。

目を開けると、澄んだ瞳のトゥラスがこちらをじっと見ていた。

「そなたのまだ知らぬ世界だ。そなたは言ったな、人間は自分を特別にして他人と区別したがると。まさしくその通り。人はこの世界を我が物にしようと争いあう。平和を理由としたはずの戦いは、人が人を殺し合うだけの虚しいものだ」

トゥラスのごくりと唾を飲む音が、静けさの中に聞こえた。

「まだそなたは深く知らぬだろうが、この世界には国というものがいくつもある。統治者が治め、そこに多くの民が規則を守りながら

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

暮らしている。それだけなら平和だが、どういうわけか統治者はその領土を広げたがり資源を手に入れたがる。望みとは、叶えられればまた新たな望みを生み出す。そうして人は、手の内にあるものでは飽き足らず、あれもこれもと欲しがった。そうして争いが次々と生まれるのだ。私もかつて、その争いの中にいた。この手は幾人もの人の命を奪った」

指輪を握って、その手をこすり合わせた。

トゥラスは、静かだ。

「そのような戦はこの広い世界のあらゆるところで起こっている。そのいくつもある戦の大半を生み出している国はヒェミチリアスという国だ。あの国の生み出す争いは無益なものばかりだ。私はヒェミチリアスへ赴き、どうにか争いを止めたい。何故争いばかりを生み出すのか理由も探らねばなるまい。そうでなくては人は同じことを繰り返すだろう」

その話を真剣な面持ちで聞いていたトゥラスは、声を低くして聞いてきた。

「それが、爺さんの言う闇か……」

「そうだ」

チュンオウは深くうなずいてみせた。

「私は闇を鎮めるだけでなく、光も探したい。闇が無くなっただけではどうしようもない。光を見つけてこそ、未来が見えてくる。……そういう旅だ」

しばらく足元を見つめていたトゥラスは、石をそっと皮袋にしまい、胸にしまった。

「難しい旅だな。だが俺に何かできるのなら手伝いたい。俺にばあさんの言ったような大きな力が潜んでいるなら、そういうことに使いたいな」

「心強い。そう言う若者が増えることこそ、

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

戦のない世界になる一歩なのだろう」

チュンオウも石を懐に戻し、それからその手をトゥラスに差し出した。

「……何だ？」

差し出された手に、トゥラスは目をしばたたいている。そう、彼はまだ何も知らないのだ。

「握手と言う。互いの手を握り合うことで、親愛や協力、和解の意味を示すのだ」

「なるほど」

トゥラスの大きくたくましい手が、握り返してきた。こうして見比べると、彼の手は本当に白い。色素が全体的に薄いようだ。陽の下で生活しない環境も相まって、透き通るような白さだ。握手によって互いの違いを知り、互いの共通の意思を知る。

「たくましい虎がこのような老いぼれと共に来てくれるのは、誠に心強いかぎりだ」

「ただの物知らずの荒れくれ虎かもしれないぜ？」

そして互いに笑って、旅は始まりを告げる。広大なる森の大地に道はない。だが共に歩む気高い若虎が心強かった。

「爺さん、もう食い終ったか？」

早々に朝食――彼にとってはタ食であるあの果実を食べ終えると、トゥラスは準備をすると言って先に小屋を出ていった。

チュンオウが小屋からようやく出た時、小屋のある木の下でトゥラスは兄弟たちに別れを惜しまれていた。

トゥラスは先ほどよりもしっかりとした服を着こんでいた。昨晩の擦り切れたズボンと麻の長袖の上に、赤と黄色で織り込まれた厚手の着物を着ていた。美しい幾何学模様が

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

織目に浮かび上がっている。そこへ幅の広い皮の帯を締め、使い込んだ鉈と、小さな革袋や麻袋を下げていた。それから大きな皮の袋を一つ足元に置いている。日差しを避けるフードをしっかりかぶり、薄手の布をマントのように首に巻いていた。

チュンオウは梯子で下に降りた。

「私はあの果実が気にいった。酒にすると旨いものができそうだ」

それにトゥラスは笑って、足元の袋を一瞥した。

「いくつか持ったから安心しな。他に旨いものがみつかったら、俺の分も全部やるよ」

「それは早くそなたの気にいる食べ物をみつけねばな」

チュンオウも笑って、それから馬のもとへ行った。繋いでいた馬は、凛と頭を上げる。

「その馬、すごくいいやつだ。賢くて頭もいいし、爺さんのことを信頼してる。俺の兄弟ともすぐに仲良くなった」

馬の鞍（くら）の辺りを探っていたチュンオウは、目を丸くして振り向いた。

「リョウキと話したのか？」

「ああ。爺さんが世界一の馬だと褒めてくれると、リョウキが自慢してたぜ」

「その通り。共に嵐や死線を乗り越え、多くの困難や修羅場を共に駆け抜けてきた。このリョウキは名馬中の名馬だ」

リョウキが尾を揺らした。首を撫でると、しなやかな筋肉が触る。澄んだこげ茶の瞳の清らかな眼差しは何を捉えているのだろうか。リョウキの心中にはどのように自分は映されているのだろうか。獣と会話のできるト

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

ゥラスがうらやましかった。

チュンオウは、鞍にくくりつけていたひと振りの剣を取り上げた。金の装飾が美しい立派なものだ。柄には翡翠と紅玉が輝いている。それを惜しみなくトゥラスに差し出した。

「トゥラスよ、そなたにこれをやろう」

驚いたトゥラスだったが、すぐに肩をすくめて首を振った。

「そんなの俺には似合わない。いいぜ、そんなに気は使わなくても」

「そう言わずに受取ってくれ。私は老いぼれだ。そなたに助けてもらうことも多くあろう。昨晩も命を救われた。その礼だと思ってほしい」

少しためらってから、トゥラスはようやく受取った。

「そういうことなら、もらっておく。実はかなりありがたい。もうこっちはほとんど使い物にならないんだ」

そうして腰の剣を帯からほどいた。それを、すぐそばの小さな納谷（なや）に放り込んだ。

「さてと、行くとするか」

最後にトゥラスは、兄弟らの前に片膝をついた。そして二頭の大きな虎の頬を撫でた。

「今までありがとうな。お前たちがいたから、今俺はこうして生きていられている」

すり寄ってきた一番大きな虎に、トゥラスは額を突き合わせた。

「ばあさんが死んだ時、お前は何も言わなかったけど、ずっとそばにいてくれた。あの悲しみを乗り越えられたのは、お前が支えてくれたからだ」

そしてもう一頭の大きな虎にも、頭を突き

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

合わせた。
「お前は俺が腹をすかしている時、いつもどこからか鳥や兎を持ってきてくれたな。うまく狩りができなかった子供の頃の俺をずっと心配してくれていた。感謝してる」
それからもう一頭。トゥラスと同じ、珍しくも白い子虎。別れというものを理解できていないのか、遊んでくれとせがむようにトゥラスにじゃれている。
「残念だな。……もうお前とは遊んでやれないんだよ」
そのように苦笑で言ったトゥラスだったが、何があったのだろうか。トゥラスは驚いた様子で顔をあげた。大虎に、目を丸くしている。
「……おい、それは本気か？」
何があったのだろうか。怪訝（けげん）な顔をしていたトゥラスは、何かを兄弟らに解き伏せられたのか、難しい顔をして、それから深く頷いた。
「そこまで言うのなら……わかった。俺が守る。安心しろ」
もう一度、トゥラスは大虎の兄弟の首を両腕で抱き、最後の別れとした。立ち上がってこちらに来るトゥラスの後を、てくてくと白い虎がついてきた。
「爺さん。旅の仲間が増えるが、いいか？」
「……それはどういうことだ？」
トゥラスは困ったように、しかしほんの少し嬉しそうに白い子虎を見下ろした。
「こいつも連れて行けって、あいつらがさ」
チュンオウがその大虎らを見ると、彼らは

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

静かにこちらを見ていた。

「いずれ俺の力になるだろう、ってさ。なんだかあいつら自信満々に言うんだ。でもこいつはまだまだ子供だから、俺が守ってやらないとな」

何のことだと言うように、白い子虎は首をかしげるような仕草を見せた。まだまだ幼い、可愛らしい虎だ。

「そなたらの兄弟、私もトゥラスと共に守ろう」

大虎たちは、何も言わなかった。彼らの言葉はチュンオウには聞こえない。進み始めた旅路を、彼らはただただ見送るのみ。森に動揺は無く、風に身を任せた木々の小枝が揺れている。そこに小鳥がとまり、木々の間を虫がすりぬける。獣は木陰に身を隠し、息をひそめているのだろう。

森の道をリョウキにまたがり進みながら、前を歩くトゥラスの、青葉を広げて天にまっすぐ伸びる気のような背中を見る。子虎を従えた、若くともなんとも気高い勇士のようだ。

遠くで、虎の咆哮が聞こえた。トゥラスへの別れの証のようだった。

虎に愛された不思議な青年トゥラスに世界を見せ、教えること。それこそが自分のなすべきことなのではないか。チュンオウは、懐に大切にしまっているあの指輪にそう語りかけた。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.